

若き植村正久の挑戦：知識人に真の宗教、 民に真の救済を一

『真理一斑』と『福音道志流部』（明治17-18年）が目指したもの

棚 村 重 行

はじめに：明治の史家・竹越与三郎の『新日本史（下）』の一節から

- I. 植村正久の生涯と、特に若き日の二著作の意義をめぐって
- II. 『真理一斑』（しんりいっばん）：宗教嫌いの知識人に真の宗教を
- III. 『福音道志流部』（ふくいんみちるべ）：宗教を求める民に真の救済を
おわりに：若き植村の二著の使信がもつ教会史的な意義

はじめに：明治の史家 竹越与三郎の『新日本史（下）』の一節から

「…ここに於いてか京都横浜の学校より出でたる青年が、前後相尋（つ）ぎて伝道世界に投ずるや、数年の潜勢一時発し、…〔プロテスタント信仰は〕…学者士君子、青年の間にはいりて一大勢力となり、…明治十六年より十九年の間にては、あわや数十年をでずして大洗礼を日本に施すを得べしとまで信ぜしめしが、二十年の春頃より一大頓挫を生じたり。基督教の盛なるや、もとよりその教理道德もて盛んなりといえども、十七年来、…実に条約改正の一事眼前に迫りたれば、速に基督教を盛んならしめて、以て外人をして、宗教上に異教国の感なからしむべしというに出たるもの多かりき。…」¹⁾

上記の引用文は、幕末・明治初期以後、幅広い執筆、歴史研究活動で著名なプロテスタント・キリスト教徒で史家・政治家でもあった竹越与三郎の有名な

日本史書からの一文である。そこには、明治十六年から同二十年にいたる植村正久が活動し始めたばかりの同時代の日本の政治・文化・宗教社会を包み込む動向・ムードに関する鋭くも重大なる諸報告が多々記されている。本稿の扱う時代を知るために必要な史実に限り要点を列挙すれば次のとおりである：①当時、京都横浜で宣教師たちから広い意味での洋学や外国語を学ぶ日本人青年の中からプロテスタント信者が輩出し、その中から伝道者たらん人々も出た（注：当初の動機はともあれ、横浜で学んでいたこともある若き植村もその一人か）；②明治16年～19年の僅かの間にこの宗教は一大勢力となったが、早くも明治20年には伝道が頓挫した（注：日本最初の「（プロテスタント）キリスト教ブーム」の開始と早々の終焉と言えよう）；③このブームの背後にはキリスト教の教理・道徳そのものへの魅力もあったが、当時起こったキリスト教諸国と日本が結んだ幕末以来の不平等条約の改正に益せんがために、日本人もキリスト教徒になるイメージアップを狙い、外国人に取り入ろうとする政治的・外交的な下心も隠されていた。少なくとも竹越はそう見ていた。

以上のように史家・竹越は日本史と宗教史の動向と、その連結関係を鋭くも見抜き、本書において実に無駄のない巧みな語り口で彼の新時代の国と宗教の動向を記してくれている。

さて、以上のような幕末－明治前期の時代の中で生まれ成長し始めた植村正久は、以下の「年譜」が概略を描く人生を歩む出すことになる。

I. 植村正久の生涯と、特に若き日の二著作の意義をめぐって

1. 植村正久の生涯について：石原謙による植村正久「年譜」（棚村要約）²⁾

本稿の中心主題は、予め論題にも示したように、若き植村正久の代表的な二つの神学論文の歴史的・神学的分析を試みることである。その課題に入る前に、簡潔に植村正久（1858:安政5年－1925:大正14年）の生涯を一応筆者流にまとめ概観しておく。

前段階（1）安政4—明治4（1857-71）：誕生からブラウン塾で英語学習。

同 (2) 明治5—11 (1872-78)：受洗、伝道参加から築地神学校へ。

第一期 明治11—27 (1878-94)：下谷教会牧師と伝道、番町教会建設。英米外遊後、組合教会との合同失敗、日本基督教会へ名称を改める。その間に『真理一斑』(1884)と『福音道志流部』(1885)を刊行、聖書翻訳に尽力。

第二期 明治27—36 (1894-1903)：日基教会は大会所属の伝道局を設置し、海外では台湾・朝鮮伝道、国内では大挙伝道に尽力し、改名していた一番町教会は成長する。

第三期 明治37—大正10 (1904—1921)：日露戦争後、全国伝道に尽力しつつ、明治37年に東京神学社を建て、富士見町教会と改名した。

第四期 大正10—14 (1921—1925)：大正10年に日基督教会創立五十年を祝いつつ、植村は海外旅行後、関東大震災に見舞われたが、復興に尽力しつつ、大正14年1月8日に召された。教会は南廉平、神学社は高倉徳太郎が神学社長職を継いだ。

以上の簡単な年譜から、以下のことが分かる。我々の研究の対象である二著作、『真理一斑』(1884)と『福音道志流部』(1885)は、上記の植村年譜のまさに「前段階 (2) 明治5—11 (1872-78)」に続く、「第一期 明治11—27 (1878-94)：下谷教会牧師と伝道、番町教会建設。英米外遊後、組合教会との合同失敗、日本基督教会へ名称を改める」時期の終わり頃、明治17 (1884) 年～同18 (1885) 年に執筆・出版された。その意味で、文字通り若き植村正久の手になる初々しい神学作品である。

では第二次世界大戦前後の有力な植村神学の研究者は、上記の二著作をどう理解・評価したのだろうか。紙面の関係で二十世紀以後の三人の日本教会史家の代表的な見解を限り紹介・コメントしたい。

2. 若き植村正久の上掲二著に関する研究史の概観と本研究の方針

そこで本節2では、植村正久の上記二著作に関する重要と思われる三研究を、刊行年度順にa, b, c, の順序で並べ、①論考の題、②大まかな研究内容、③その

研究論述への植村の評価の順序で紹介し、最後に寸評を加える。

その上で、本研究の方針と方向性を明確に立てたい。

- a. 石原謙：第二次世界大戦前の1910（明治43）年に公表された彼の植村正久の初期神学的諸著作に関する草分けの研究だが、問題は『真理一斑』（1884：明治13年刊行）のみが紹介・議論された点である³⁾。石原によれば、若き植村の本書の内容は、第一に「实际的なキリスト教弁証論」で、第二に「合理論的」で、第三には「教義学的」ではなく、第四に「宗教の内的経験」には触れていないと特徴づけられる。だから「実践的・道徳的傾向が強く」、この時代の「啓蒙思想的特質」を強く反映していると評された。この石原の紹介から明らかなように、時期的・内容的にも深い関係をもつ『福音道志流部』（1885：明治14年）については、何故か言及されず、両著の比較研究も行われず、上で指摘したように『真理一斑』だけの一種の紹介であり、紹介にやや不可解さが残る論考である。
- b. 大内三郎：戦後の2008（平成20）年に刊行された大内の研究では、石原とは異なり植村の『真理一斑』と『福音道志流部』の二つの著作の関連を認め、それらの比較研究を根拠とした組織神学的解釈の研究の新登場を告げる⁴⁾。彼によれば、植村の宗教の中心には「志の宗教」があり、それは神の「志」である十字架の「救いの福音」により、罪人が「更生（うまれかわり）」、真の「宗教心」を抱いたとき、それが神を志向する「靈性」となるという⁵⁾。これを神の働きの視点から見ると「唯一の神としての創造の働き、機能とキリストにおける贖罪の働き、機能との二者に分かつ」という⁶⁾。この大内の分析の強みは、植村の神学（その靈性神学も含め）に歴史的解釈を踏まえた新しい組織神学的な解釈を公表したことである。逆に欠点は、i. 植村が二著、『真理一斑』と『福音道志流部』という宗教文献を1884-85年の間になぜ矢継ぎ早に刊行したのか、ii. これらの二著はどんな意図で刊行されたのか、それらの問いへの解答を明らかにすべきであった。だがすぐ述べるように、この弱点は大内の一年前に研究を公表した雨宮栄一により、内実と方法論において大きな改善を見ることになる。

c. 雨宮栄一：『真理一斑』と『福音道志流部』の研究は大内のそれよりも一年早い2007（平成19）年に刊行されていたが、石原の研究は勿論のこと、大内の研究の内容と水準を越える新機軸を示す研究である⁷⁾。その要点を列挙すれば、以下のとおりである：①植村の二著作について、大内と異なり歴史学的・組織神学的な解釈を施す前に、植村の両著の目次を対比した簡単な比較対照表を提示し、両著の構成的異同を考慮し、それが意味する文学的・神学的な意図を論じた⁸⁾；②更に、二著の目次を並べる単純な文学的構成比較を踏まえ、雨宮は両著作の類似性と相違性を指摘する。i. 先ず両著の類似性は「…宗教一般を語り、その前提からキリスト教を語り、人間の存在を論じた点⁹⁾。ii. 反対に、これら著作の諸相違点もあげる：『真理一斑』は、a. 当時の啓蒙思想に翻弄されていた知識人を念頭に置いていたので、〔本著作の〕最後で「人間の靈性が強調される」。また「イエス・キリストの十字架による贖罪には深入りせず…立派に学術研究の対象」となる宗教だと謳う；b. 逆に『福音道志流部』では〔求道者・信者を主として読み手としているので一棚村〕罪が強調され、キリストによる贖罪による救し、つまり贖罪信仰が強く説かれる¹⁰⁾。以上の単純な文学批評的分析を踏まえ、雨宮は結論づける：「ここに示されている事柄〔贖罪信仰〕は…啓蒙主義との論争を目指した『真理一斑』では、表面に出され」ない。「他方、キリスト教信仰を求めている人々、また信仰の初心者に向けられた『福音道志流部』では明確にされている」と¹¹⁾。雨宮の研究で植村の両著の文学的特質と相違点は上記の比較で相当解明されたと言える。

だが逆に雨宮への残る疑問はこうである：「では神学的著作としての『真理一斑』と『福音道志流部』の背後に想定された読み手の知識人対求道者（ないし信者）は植村の二種著作に対してどう反応し、それが当時の教会外知識人ないしキリスト教宗教書読者の行動や教会史的反応に影響したのかという歴史的対応の解説である。当然続いて行われるべきは、これら二種の読者層の「教会史的行動の変化」の歴史的分析である。だがこの重要作業が十分なされていない点が続く研究者に残される課題に他ならない。

そこで、かかる反省に応えるべく、本稿の研究は、①先ず植村の二著に対して雨宮の簡単な「文献の構成比較」の発想に学びつつも、より緻密な「文学批評的な構造分析」を試み、両著の文学テキストとしてみた場合の構成比較を実行する。②次に、両著の文学的構造変化の背後には「若き植村」の神学思想的動機と歴史家竹越与三郎が描く明治初期以後の一般日本史的動向がどのように絡んで彼の神学的発言に至らせるのか、この論考に与えられたページ制約が許す範囲で論じることとしたい。要は、植村の二つの文書のテキストに対して、文学構造分析を第一に、その教会史的解釈は第二にという、明確な研究の手続きを採用する。しかし、本稿では第一の課題を中心とし、第二の課題については、論文執筆者は明治期教会史における神学史的情報の重大な出来事に限定し、事件や神学思想の大局的な意味を教会史的文脈を考慮し解釈し指摘するに止めたい。

そこで早速、以下植村の二文書に対する雨宮以上に緻密な本稿著者なりの「文学的構造分析」に入り、その結果を読者と共有する作業から始める。

3. 若き植村の二著を対比する「文学的構造分析」の試み；その分析を踏まえた二著の刊行が明らかにする二種の読者層への教会史的なアッピールと諸反応について

a. 植村の『真理一斑』(1884: 明治17年)¹²⁾と『福音道志流部』(1885: 明治18年)¹³⁾に対する本稿の「文学的構造分析」のための両書章節タイトル対照表

【真理一斑】(1884:新教版)	【福音道志流部】(1885:新教版)
(章 章題 総頁数:約180頁)	(章 章題 総頁数:約33頁)
第一章 宗教を総説す その一 12頁	第一章 宗教の切要なるを論ず 4頁
第二章 宗教を総説す その二 12頁	「もし真正の宗教無きときは、一身一国のうえにこれらの危害たちどころに至るべし」(p.14)
第三章 宗教の真理を講究するに必要なる精神を論ず 17頁	
1 懐疑の性質を明らかにすべし	
2 先人の妄見に圧倒せられず、慣習の治下を脱せざるべからず	
3 真理を敬崇して、これに忠義なる志操を培養せざるべからず	
4 宗教の真理を知らんと欲するものは、須らく意想の上に安んぜず、みみず〔印刷漢字に無し-恐らく「自ら」の意か〕からこれを実践するの気風なかるべからず	
5 徳性を涵養しわが現状を視察すべし	
第四章 神の存在を論ず その一 17頁	第二章 神の在(ましま)すこととおよその性質を説く 8頁
1 無神論決して容易にあらず	「神の世を治めたまうは…一切の事物をこととく主宰(つかさど)りたまわざるはなし」(p.21)
2 有神論の倫理を論ず	
3 有神論の起源いづれの所に在りや	
第五章 神の存在を論ず その二 40頁	第三章 人の靈魂(たましい)を論ず 6頁
第六章 神と人との関係を論じ併せて祈祷の理を説く 12頁	「…万物の首長たるものは、靈なる魂を備えて物の是非を分かち、事の善悪をすることあればなり。これを心性の作用(はたらき)という」(p.23)
1 上帝は実に吾人を去ること遠からず	
2 上帝は万物に在りて作用をなす。我らはすなわちこれによりて、生きた動きた命あるなり	
3 上帝は生民の父なれば、吾人の上帝における実に父子の関係あるものとす。	
祈祷のこと	
第七章 人の靈性無究なるを論ず 28頁	

<p>第八章 イエス・キリストを論ず 20頁</p> <p>第一 キリストの過誤罪悪無きを弁じ、その聖徳実に至れるを明らかにす</p> <p>第二 キリストの聖徳は、完全美備、普く万世万国に通じて、吾人の標章模楷（ほかい）となすべきものなるを論ず</p> <p>第三 キリストの品性は衆美を兼ね、衆徳を適度に具有して、過ぎ不及の跡を見るべからず</p> <p>第四 キリストの常に自ら覚知し居たることは最も驚くべき事実なり</p> <p>第五 イエス・キリストが許多の酸苦に遭いて、ついに十字架に釘せられたるを論ず</p>	<p>第四章 人の罪惡（つみ）あることを論ず 7頁</p> <p>「今人類は罪惡に沈み、汚穢（けが）れに染みて、…靈魂の形状病みさらばえて、見る影もなし」（p.36）</p> <p>第五章 吾人いかにして罪惡を免るるや 8頁</p> <p>「吾人（ごじん）幼きときより、上帝の意（こころ）にそむき、罪惡を犯せること極めて甚だしといえども、わが罪惡を悔い、これを惡（にく）みてイエス・キリストの贖いを信ずるときは、おのれに功（いさお）なしといえども、信仰によりキリストの贖いによりて、義とせらるるを得べし」（p.42）</p>
<p>第九章 宗教学術の關係を論ず 18頁</p> <p>第一 教法家〔宗門教理を教える人〕が學術の進歩に反対せる歴史上の事實は、論者の揚言することきものにあらざるを論ず</p> <p>第二（前文略）學術いよいよ開け、聖經の解訓詰（次の一字不明）漸く進歩するに従い矛盾するところ次第に消え行きて、一致合和の形状を呈するに至れり〔以下、長文ゆえに略す〕</p> <p>第三 宗教と學術とは互いに相反せざるのみならず、すこぶる緻密なる關係を有するものなり</p>	

b. 植村の上記二著の詳細な「文学的構成分析」から判明する幾つかの洞察
（注：以下の記述では、『真理一斑』を簡潔に『一斑』、『福音道志流部』を『志流部』と略して表記する）

まずは、若き植村の初期の二著である『一斑』と『志流部』の新教出版社刊行の印刷テキストにおける両者の頁数について比較してみよう。

i) 両著の頁数：『一斑』は約180頁を費やし、言語は日本語・漢語・カタカナ語の三種が使用され、漢詩などからの諸引用も混在する。だから、明治18年という当時でもかなり力の入った宗教的・神学的な学術論文的な香りが濃厚なキ

リスト教の護教書であると言えよう。

これに対し『志流部』を比べると、この顕著な事実は頁分量は約33頁で、前著の約六分の一程度の分量の小著、現代流に言えば宗教冊子（例：伝道パンフレット）に留まっている。この小著でも無論漢語も使われるが、民衆により親しみやすい日本語・漢語・カタカナをより多く使用している。だから、この著作は知識階層向けというよりは、明らかに基督教に関心をもつ人々と教会での求道者たちに、基督教の救いとは何かを分かり易く解き明かすことが主要な目的であったと思われる。

ここで要約すれば、『一斑』は分量が180頁でかなり厚く、更に学術的な論理と香り漂う宗教としての基督教に対する神学的歯ごたえのある宗教の弁証の書である。逆に、『志流部』の方は、分量は33頁ほどで前掲書の六分の一程度の小著であり、文書の構成もまた簡素な5章立てで庶民ないし平民に読みやすく工夫されている。今日でいう「伝道パンフレット」のようジャンルの小冊子と総括できるであろう。これをもって、明治期の一つの知性史的論争や伝道のための「二正面作戦」が若き植村によって立案されていたのである。

ii) 更に『一斑』、『志流部』のトピックや章立ての設定の仕方に関しても両者には大きな相違が見出される。『一斑』の文学構造では、第一～第二章で「宗教の総説」、第三章で「宗教の真理を講究するに必要な精神」というアカデミックなタイトルが付され、明治初期の基督教に関心のあるインテリ・知識層で基督教に関心がある層の人々が購入し読むようターゲットを絞っていたに違いない。それ故に、第四～第五章で「神の存在」を論じ、無神論を批判し有神論を支持する。第六章では、神人関係を論じ、その最も重要な絆としての祈祷の意義を説く。第七章で「人の霊性無究」が説かれ、第八章では「キリスト」の聖徳、品性、自覚力、十字架の苦闘などキリストの生涯に示される救済的な気高（けだか）さを説く。格調の高い宗教必要論を踏まえた三一の神とキリストの神論の護教論的提起こそ植村の本著の狙いである。

これに対して『志流部』の特徴としては、第一章は「宗教の切要なるを論ず」として一応『一斑』同様に、第一章は「宗教の切要なるを論ず」として、

宗教（一般）の「切要」を説く。続いて第二章「神の在（まします）こととおよびその性質を説く」という題で神の实在論を読者に訴える。ここまでの二章が奏でるしらべは、「一斑」第一章から第八章の大きな論調に完全ではないが、ある程度は類似しているように思える。

最後に我々の作成した対照表では、「一斑」の中でしか存在せず、「志流部」では全く存在しない「第九章 宗教学術の関係を論ず」の章は極めて興味深いですが、その詳細な分析議論は次のⅡの後半で行う。この構想紹介をもって、ここで一度文学構成の分析を止めておこう。そこで続く本稿のⅡの前半では、特に若き植村正久の『真理一斑』の成立の背後にあった当時の知識人層の知性史ないし思想史的動向を描き、上掲書の「一斑」の第九章に関する文学批評的な分析と考察へと研究の焦点を移行する。

Ⅱ. 『真理一斑』^{しんりいっばん}：宗教嫌いの知識人に真の宗教を

1. 「真理一斑」の背景にある外国哲学の輸入と受容をめぐる時代証言：竹越与三郎が報じる当時の一資料紹介と、その歴史的分析

「哲学なる者〔ママ〕の盛んに行わるるに至りしも、またこの頃〔竹越論文の文脈で言えば明治14（1881）年の頃の意〕より初（はじま）れり。

（以下略）…而（しこう）してこの哲学の流行は、先ず政治論の勢によりて発したるものにして、政論の上に於いてスペンセル（スペンサー：棚村）の勢力激甚なるものあるより、彼の総合哲学こそ、先ず哲学界に入り来たりたる最初にして、かつ最強のものなりき¹⁴。而して多くの哲学者はスペンセル哲学の一半を取ってそのコムト〔コント〕派と相合する所、即ち実験説のみを確守して、以て宗教に反対せり¹⁵。…然れども基督教は哲学上に於いては、決して当世の学者に劣るものにあらず。むしろ蓄蔵の点に於いては、決して当世の学者に劣らず博通なりしかば、彼らは日耳曼（ゲルマン）の超絶哲学を引き来って、スペンセル、コムト派の哲学を駁せり。而してその先陣に立って、最も基督教主義の哲学を主張せしは、

『六合（りくごう）雑誌』の日耳曼哲学の超絶思想¹⁶⁾を伝えたるは多くのこの雑誌の力なりき¹⁷⁾。

上記の竹越与三郎の手になる知性史的な論評において、我々にとっても幸いなことだが、明治17-18（1884-1885）年の頃の明治期における海外から日本へ流入してきた欧米哲学、特にスコットランド・英国と米国における動向について極めて簡潔だが情報量満載の学術的報告が残されている。竹越の印象に残った範囲の観察に基づき、当時の日本における哲学思想の受容と流行に関する短い報告が記されている。そこで、上記の竹越の資料に記された当時の日本の思想・哲学界の動向報告を要約し、棚村が作成した現代語の要旨を以下紹介したい：

（要旨）：我が国では「新国民建設の大業」（=明治維新）以来、西欧哲学に触れ学ぶこととなった。具体的に言えば、①明治14（1881）年頃に開始され、先ず英国のH.スペンサー（竹越：スペンセル）の哲学が流行し始めた。それは元来英国では政治論の勢いで発した思想だが、彼の「総合哲学」は日本の「哲学界」に最初に到来し最強のものと見做された。②だが日本の多くの哲学者らは、スペンサー哲学の一部を採用し、「コント派」も主張する「実験説」だけを守り、「宗教」に反対し、基督教だけでなく仏教すら敵にした。③だが基督教は「哲学上」においても「当世の学者に劣らず」、却って「博通（はくつう=広くものに通じること）」ゆえにドイツの「超絶哲学」を味方につけて、スペンサーやコントの哲学派を反駁した。その反駁の為に「最も基督教主義〔的：棚村〕の哲学」を強く主張したのは、かの『六合雑誌』（りくごうざっし）で、ドイツ系「超絶哲学」を日本に伝えたのはこの雑誌の力だった。（なおこの「要旨」を更に短くした「要点」は、読者が必要ならこの本文末尾の後注を参照のこと¹⁸⁾。）

さて以上のような思想史的環境のなかで、我々が若き植村正久の神学思想が生まれ、対話対象者たちや諸集団、階層者らとの知性的な対話ないし対決のドラマが展開されるのである。このような思想史的な予備作業の土台に立ち、

本章の主役である若き植村の記した神学論考『真理一斑』の内容とそれへの文学批評的観点からの解釈作業へ移ろう。

2. 『真理一斑』の第九章の文学批評的な構成分析（一つの例証として）

既に指摘したように、この著作の第九章では『福音道志流部』との文学批評的構成比較対照を試みているが、植村により書かれた『真理一斑』には、前著には全く存在していない独自の章がある。それは、第九章の知識人層むけに書かれた「宗教学術の関係を論ず」なる題が付されている文書である。これを読むとその内容と論文の意図は歴然としてくる。察するに、この章は特に学問的な内容と論調をもって記された章であり、恐らく知識人的集団を念頭において、植村は基督教の一種の護教論を展開しているに違いない。そこで、早速読者と共に本書の第九章の文学批評的な分析を試みよう。

既に指摘したように、第九章は『真理一斑』全180頁中の18頁、つまり全文中10%を費やし、植村は特に力をいれて細部にもわたる議論を展開している。いやそれだけにとどまらない。この章「宗教学術の関係を論ず」を支える三つの節の見出しにも以下のように記されている。再録しよう：

第九章 宗教学術の関係を論ず 18頁

第一 教法家〔宗門教理を教える人〕が学術の進歩に反対せる歴史上の事実は、論者の揚言するときものにあらざるを論ず

第二（前文略）学術いよいよ開け、聖經の解詁漸く進歩するに従い矛盾するところ次第に消え行きて、一致合和の形状を呈するに至れり〔以下、長文ゆえに略す〕

第三 宗教と学術とは互いに相反せざるのみならず、すこぶる緻密なる関係を有するものなり

これら三表題で植村が声高に強調する見解は、以下三点である。①「教法家」、つまり宗門の教理を教える人は学術的研究に反対するが自分はそうではないこと、②聖書の学術的研究は進歩し、それと共に聖書の解釈は進歩し、③結局宗教と学術とは背反関係になく、むしろ緻密なる関係にあるべきだ

ということである。要は現代流に言うると、この明治初期の「反ファンダメンタリスト（根本主義者＝聖書の学問研究反対者への反対者）」に抗して、「聖書の学問研究は肯定し緊密な関係を築け」と聖書の学問研究の擁護者・植村正久は主張したのである。何故ならば、この第九章の第一節の中で指摘している教理を教える立場の人々が近代の学術に反対してきた姿勢は、実はその論を唱えた人々の主張どおりではないと植村は考えるからである。そこで第二節で、彼はこう主張する：時代の進展の中では宗教の經典（例えばキリスト教では聖書正典）の解釈・註解などは次第に進歩を遂げ、それに従い矛盾する理解は減少してゆき、經典と学問研究との間には一致こそ増しはすれど、矛盾は減少する事態に至ったと。だから、最後の第三節で植村は宗教と学術との関係はもはや対立関係ではなく、「すこぶる緻密なる関係を有するもの」だと結論づけるのである。

現代から見れば、この植村の見方はかなり楽天的すぎると映るかもしれない。だが、欧米から輸入した「文明開化」の時代に突入している明治十年代の後半（1884: 明治17年と1885: 明治18年）の状況を考えれば、彼の判断はあながち時代錯誤とまでは言い切れないだろう。この短い分析の結果から見ても、植村自身は極めて積極的に聖書正典研究は勿論、キリスト教の各分野においても個々の「学術的研究」のもつ肯定的な効果を称（た）え、その受容と実践をキリスト教知識人たちにも強く勧めているからである。

3. 「真理一斑」に関するまとめと評価：「宗教嫌いの知識人に真の宗教を」

以上の分析を通し、本書「一斑」についての文学批評的考察と歴史批評的な背景理解を総合すると以下の諸結果を得ることが出来たと言えよう。

i) 当時の歴史的状況：①本著の刊行がなされた明治17（1884）年における日本の知識層の動向は、歴史家竹越与三郎によれば、例えば宗教と哲学の関係は以下の状況にあった：明治日本の知的「維新（革命）」では、①日本の知識層一般は英国のスペンサー哲学を進んで摂取した。②だが特に日本の哲学界はスペンサー、コントの一部を採用しても、宗教（キリスト教、仏教）には反対し

た。③キリスト教側は超絶哲学を味方とし、スペンサーとコントに反対した。④この中で『六合雑誌』はキリスト教哲学を主張し、この雑誌を通してドイツの超絶哲学を日本に伝えた。

ii) ここで今我々が注目すべき事実は、竹越の観察によると、①当時の日本の知識層一般の反応は英国びいきで、特にスペンサー哲学を好んでいたらしいこと。②ところが日本の哲学者達はスペンサー、コント哲学を一部は摂取するものの、宗教（キリスト教、仏教）には激しく反対していた。ここからプロテスタント・キリスト教対日本の知識人の代表、哲学者たちとの緊張と論争関係が増大していったと竹越は指摘する。

こうした知的世界が複雑な状況にあればこそ、植村正久は日本の哲学者・知識人たちとの関係を真剣に考慮し、あの名著『真理一斑』、特に「第九章 宗教学術の関係を論ず」において論陣を張り、宗教嫌いの反対派の哲学者や知識人らに対しキリスト教牧師としての自説を述べたのである。

最後に、今一度植村の論点と主張を反復すればこうなるろう：「教法家」、つまり①宗門の教理を教える人は学術的研究に反対するが、自分はそうではない。②例えば聖書の学術的研究は進歩し、それと共に聖書の解釈は進歩するからだ。植村にあっては哲学や学術一般との関係も同様で、③彼の結論は「宗教と学術とは背反関係になく、むしろ緻密なる関係」にあるべきだということである。要は、明治初期からの聖書の学問研究の擁護者・植村正久はここで彼の肯定的な姿勢を貫いたように、キリスト教と哲学の関係についても似た積極的肯定的な関係を築くことを希望していたに相違ない。まさに「宗教嫌いの知識人には真の宗教を」、宗教と学術を緻密に結ぶ「真の宗教・キリスト教」を 수용せよとの植村の期待を込め、彼はその論考の価値を知識人に問うたに違いない。

Ⅲ. 『福音道志流部』：宗教を求め民に真の救済を

1. 『福音道志流部』の刊行をめぐるキリスト教と社会：竹越与三郎が報じる証言から

「基督教〔福音主義タイプのそれ：棚村〕の初めて日本に伝わるや、…中流以下の人々より伝わりたれば、その信徒はもとより学士にあらず。…然れどもその全体は実に基督を理想せる君子なりき。…ここに於いてか京都横浜の学校より出でたる青年が、前後相尋（つ）ぎて伝道界に投ずるや、数年の潜勢一時に発し、局面頭に一変して、滔々たる大波の勢いもて学者士君子、青年の間に入りて一大勢力となり、今まではこれを軽侮したるものも、翻（ひるがえっ）てこれを恐るるに至り、明治十六〔1883〕年より十九〔1886〕年の間にては、あわや数十年を出でずして大洗礼を日本に施すを得べしとまで信ぜしめしが、二十〔1887〕年の春頃より一大頓挫を生じたり。基督教の盛んなるや、もとよりその教理道徳もて盛んなりといえども、十七〔1884〕年来、世の歓迎を受けたるものは、実に条約改正の一事眼前に迫りたれば、速に基督教を盛んならしめて、以て外人をして、宗教上に異教国の感ならしむべしというに出たるもの多かりき。…」¹⁹⁾

（要旨）上に引用した竹越の論文には、幕末のプロテスタント・キリスト教の伝達・受容から明治20年前後までの宗教と社会動向に関する貴重な情報を、彼一流の筆裁きで巧みに記している。そこで先ずは、この記述に従い、彼の同時代に起こった諸動向を要点化し紹介する：①幕末以来、日本に出現したプロテスタント基督教徒は中流以下の人々で「学士」層ではないが、周囲の異論に負けず信仰を貫いた。②だが明治に入り、「京都横浜の学校〔具体的校名不詳。同地の基督教主義諸学校か？：棚村〕」を出た「青年」の中から信仰者が輩出し「伝道世界に投ずるや…大波の勢もて学者士君子、青年の間に入りて一大勢力」となった。その結果、明治16年～19年には、もしかしたら数十年以内に

は洗礼者が全日本に拡大するのではと期待させられた〔「明治期の「キリスト教ブーム？」：棚村〕。③だがそれは「二十年〔明治20（1887）年〕の春頃より一大頓挫」した。原因は、幕末以来諸外国と結んだ不平等な「条約改正問題」が浮上し、その解決のため一部には「キリスト教を盛んにして」、「異教国」観を変え日本の政治・外交を有利にしたい下心を持っている人々も出てきたからである。だが現実はずぐにそうはならなかった。…」（注：竹越の記述は更に続くが、我々の関心は若き植村の伝道の動向と明治16-20年頃迄の日本人の対外観とプロテスタント・キリスト教の発展の関連問題なので竹越の記録からの引用はここで一応終える）。

さて竹越の記述で我々に最も重大な歴史的情報は、③の明治16（1883）年から同19（1886）年という時代と時期に関するそれである。何故ならば、竹越が言うように、この明治16年～19年のプロテスタント・キリスト教の教勢は順風満帆、数十年以内には洗礼者と教会の数が全日本に拡大するのではと期待膨らむ時代であったからである。言わば「明治期プロテスタント・キリスト教ブーム開始」のようなものだろう。ところが、現実は期待外れで、竹越によればこのブームは「二十年〔明治20（1887）年〕の春頃より一大頓挫」した。

とすれば、竹越が報告した明治の伝道史上初の「キリスト教ブーム」（明治16～19年）のなかで、植村正久のあの二著、『真理一斑』（1884:明治17）と『福音道志流部』（1885:明治18）が刊行された事実を我々は改めて記憶しておく必要がある。なぜならば、明治16～19年というあのキリスト教ブームの「今こそ伝道の絶好の時代、この機を逃すな」というのが、若き植村正久も含め伝道開始後のプロテスタント諸教会側の姿勢であったに違いない。このただ中で、彼のあの二冊のプロテスタント・キリスト教の著作が刊行された事実を再確認したい。その上で我々は改めて問おう、この時期にキリスト教に強い「関心」が膨らんだ日本の知識人ならぬ一般庶民は、どのように植村正久の二著、特に『福音道志流部』に反応したのかと。そこで、我々は植村の『福音道志流部』に目を向け、その文学的批評的研究と神学研究に着手しよう。

2. 『福音道志流部』の文学批評的な構成分析と、神学的なコメント

i) 植村の『福音道志流部』（以下、『志流部』と略記する）の文学批評的な観察の要点を、同じ新教出版社版のテキストの『真理一斑』との文学批評的比較を時に織り交ぜつつ述べよう：①先ず文書のジャンルで言えば、『志流部』（1885年：明治18年）は明らかに神学的学術論文ではなく、むしろ「伝道パンフレット」というべき文学的範疇にはいる。反対に、あの『真理一斑』は、約180頁の大きな「神学的著作」に近い書籍である。これに対し、本書は僅か前著の六分の一、33頁ほどの頁数に留まる。とすれば『志流部』は疑いもなく「伝道パンフレット」型の庶民啓発のために作成・印刷され、読むに気軽な頁数の宗教文書、いや信仰解説にして宣伝書である。②更に内容を比較すると、『一斑』の文学構成は全九章からなる、かなり厚い本格的な神学論文である。それに対し、『志流部』は全五章で、その第一章は4頁、第二章は8頁、第三章6頁、第四章7頁、第五章8頁、合計33頁の小著、改めて言えば手ごろな分量の「伝道パンフレット」と称すべき文書である。両著作の相違点を記憶にとどめておこう。

ii) 次に、この『志流部』自体の文学的構成を示してくれるその「目次」を再び以下に掲げて、改めてこのパンフレットの文学的構成のなかに含まれている内容、つまりその信仰的・神学的なメッセージにも注目してみたい。

a) 『福音道志流部』の文学批評的分析から見えるもの：

第一章 宗教の切要なるを論ず 4頁：「もし真正の宗教無きときは、一身一国のうえにこれらの危害たちどころに至るべし」(p.14)

第二章 神の在（ましま）すこととおよびその性質を説く 8頁：「神の世を治めたまうは…一切の事物をこととく主宰（つかさど）りたまわざるはなし」(p.21)

第三章 人の靈魂（たましい）を論ず 6頁：「…万物の首長たるものは、霊なる魂を備えて物の是非を分かち、事の善悪をすることあればなり。これを心性の作用（はたらき）という」(p.23)

第四章 人の罪惡（つみ）あることを論ず 7頁：「今人類は罪惡に沈み、汚穢

(けが) れに染みて、…靈魂の形状病みさらばえて、見る影もなし」(p.36)

第五章 吾人いかにして罪惡を免るるや 8頁:「吾人(ごじん) 幼きときより、上帝の意(こころ) にそむき、罪惡を犯せること極めて甚だしいといえども、わが罪惡を悔い、これを惡(にく)みてイエス・キリストの贖いを信ずるときは、おのれに功(いさお)なしといえども、信仰によりキリストの贖いによりて、義とせらるるを得べし」(p.42)

b) 分析一／その文学批評的構成と読者層への戦略：

本冊子の目次における第一章～第五章のタイトルの並べ方を見るとこうなる：「第一章 宗教の切要なるを論ず」→「第二章 神の在(ましま)すこととおよびその性質を説く」→「第三章 人の靈魂(たましい)を論ず」→「第四章 人の罪惡(つみ)あることを論ず」→「第五章 吾人いかにして罪惡を免るるや」という短く簡潔な構成になっている。次に、これら五章の意図的に更に簡潔にしたトピックの要点を並べてみると、「第一章：宗教は切要」→「第二章：神は存在」→「第三章：人の魂」→「第四章：人の罪惡(つみ)」→「第五章：いかに罪惡を免れるか(=救済)」となる。これを見るだけで、植村の護教論のポイントが浮かびあがってくる。そこで次に、本冊子の上記の文学構成から信仰的内容へと関心を切り替えてやや詳細に考察してみよう。

c) 分析二／本冊子【志流部】の全五章のやや長めのタイトル比較：

さて本冊子の第一章のタイトルは「宗教の切要なるを論ず」である。振り返ると、植村が一年前(1884: 明治17)に刊行していた【真理一斑】の目次でも、第一～第二章で「宗教の総説」、第三章で「宗教の真理を講究するに必要な精神」などと学術色の濃い章題ながら「宗教」や「宗教の真理」という章題を論考【一斑】の章題の一部に付していた。これは既に指摘したように、宗教の、特に知的側面に強い関心のある明治初期の知識層や学生、エリート層を念頭においていたからである。だから、そのなかで特に宗教全般を嫌ったり、殊にキリスト教に反感をもつ人々に対し、植村が【一斑】の読者層として選び、

あの『一斑』の読み手として狙いを絞っていたと思われる。それに対して、あの小著『福音道志流部』ではどうだったのか？次に考えたい。

i) 先ず興味深いのは、この小著『志流部』でも似たように「第一章 宗教の切要なるを論ず」と題し、「キリスト教の切要なるを論ず」ではなく「宗教の切要なるを論ず」としている点である（注：下線部は植村）。推測だが、その理由は『一斑』の目的と読み手が宗教全般に反感をもつ、ないし「好意的ではない」知識層であったのに対して、『志流部』は読み手が「宗教」ないし「キリスト教」に知識はなくとも最低限関心をもつ一般庶民で、その広い庶民層へのキリスト教冊子配布と伝道いう強い目的と配慮が植村にあったからであろう。その意味で、植村は第一章「宗教の切要なるを論ず」として「宗教」という概念を意識的に使用したと思われる。つまり『一斑』『志流部』の共通の「宗教の切要」でも、植村が一般庶民層をキリスト教伝道の対象として狙った冊子の『志流部』の第一章のタイトルは「宗教の切要なるを論ず」だったのである。

ii) 次に「第二章 神の在（ましま）すことおよびその性質を説く」で、植村はここからキリスト教の神の实在と神の性質、神の配慮に関するテーマに切りかえ論じる。第三章では、その神に應對する「人の靈魂（魂）を論ず」と題し、魂こそ人間の人格的中心だと教える。だが第四章では「人の罪惡（つみ）あることを論ず」と題し、人類的な規模で人間は「罪惡に沈み」、「汚穢（けがれ）に染まり」見る影なしだという。教理史的に言えば、「全的墮落（Total Depravity）」説に接近した罪の現実性を植村は信じ説いているのである。

iii) 最後の第五章では「吾人いかにして罪惡を免（まぬがる）るや」と題し、植村のこの時点での「救済論」が説かれている。ここで彼は「罪惡を犯せること極めて甚だし」と、第四章で彼が説いたアウグスティヌス的な全的墮落説に呼応するような悲観的な罪惡論を記している。ところが、第四章のこの罪惡観にも拘わらず、第五章では「わが罪惡を悔い、これを惡（にく）み「イエス・キリストの贖いを信ずるとき」、「信仰によりキリストの贖いによりて義とせらるるを得るべし」と主張する。とすれば、ここで文章の読み手には意外にも植

村は「わが罪惡を悔い、これを憎む」とする一種の道德努力的条件を求めているかとの疑問が起こるかもしれない。つまり宗教改革者の救済論、「キリストの恵みのみ、信仰のみ」をひらすら主張する神学の伝統と、植村のいう「わが罪惡を悔い、憎む」とは、近代の信仰復興運動家たちが主張した条件、つまり救済のためには「人間の罪過反省、ないし道德的自覚必要説」と同じことなのかとの問いが浮かぶ。それに加えて植村の『志流部』第四章で示された全的墮落説的な罪觀との整合性はいかに、という神学的問いも起こり得るであろう²⁰。しかし上記の植村の「罪論」に関する疑問案件は若き植村正久の短いパンフレットの中で言及された救済論的な小さな発言であり、筆者の疑問の解決は更に同時期の植村の他の神学的な諸資料と突き合わせて解決されねばならないだろう。その意味で小さな疑問と受け止めてほしい。

ともあれ、この若き植村正久の小冊子『福音道志流部』の内容と配布の目指すところは以下のメッセージ伝達であった。このキリスト教冊子の目的は我が日本国の民衆のなかの「宗教を求める民に真の救済を」知らせたいとの若き植村正久の願い実現である。だからこの冊子は、若き植村の手になるキリスト教の救いを、明治10年代前半の日本全国の大衆一人一人に告げるパンフレットだったのである。

3. 『福音道志流部』に関するまとめ

結論的には、この小著の文章で主張される植村の初期の神学と論考に存在した柔軟な神学的対話や論争的主張そのものは、その後の彼自身の信仰・神学的な成熟を重ね、加えて加齢と経験によって一層深い広い次元へ深化と進化を遂げていったことは疑いない。このパンフレット・タイプの彼の伝道文書とはいえ、多くの無告の民に何とかキリスト教の救済の「福音」のエッセンスを可能な限り伝達せんとする若き植村なりの救済論的使信が存在した。最後に言えば、本論考の副題にある「宗教を求める民に真の救済を」というのが、若き植村正久の伝道小冊子、『福音道志流部』の使信であり、狙いであったと総括出来よう。

Ⅳ.おわりに：若き植村の二著の使信がもつ教会史的な意義

本論文の筆者という現代の読み手の一人として、ほぼ140年も前の明治17（1884）～明治18（1885）年に著され刊行された牧師・植村正久の初期の時代の神学的な二著作を読む作業は大きな困難を伴った。たとえ現代の出版社が印刷した活字印刷テキストと言えどもである。筆者（棚村）も含め、これらを読み解かねばならぬ現代の読み手には重労働であった。植村や彼の同時代の人々の使用する文体、表現、神学や信仰内容への疑問や問いは多々残る。本研究が取り上げた若き植村が著した二著作を対比しつつ、その神学メッセージを読み取る作業も難航を極めた。だが、その結果、読み取ることの出来たメッセージは本論文の二つの副題に付した表現にほぼすべて結晶化されている。『真理一斑』（しんりいっばん）は、「神学論考（書籍）」の文学的形態（ジャンル）で、宗教嫌いの知識人に真の宗教を伝達することを目指した。反対に、『福音道志流部』（ふくいんみちしるべ）は、宗教を求める民に真の救済を提供するため、明治型の「伝道パンフレット」の文学形態で広く民衆に提供した。これこそ神学者・キリスト教牧師・伝道者である若き植村正久の一つの出発点をなす「文書伝道戦略」の誕生を証言する出来事であった。それと同時に多彩なキリスト教伝道戦略と実践における「文書伝道戦略の開花」を示す事件の、最初とはいわずとも、少なくとも若き植村が参加・推進した一つの「神学的事件」であったことは間違いなからう。

（たなむら・しげゆき）

注

- 1) 竹越与三郎(たけこし・よさぶろう)『新日本史 下』(2005年、東京:岩波書店), 300-301頁。
- 2) 石原謙、「第二部 日本のキリスト教史から」、「II 公会主義とその姿勢」『石原謙著作集 第十巻』(東京:岩波書店、1979)、155-156頁より棚村の責任で本論考の流れを理解するために必要な比較的大きな出来事のみを抜粋し年表化した。
- 3) 石原、「思想史上の植村先生一先生の著作に基いて一」、上掲書、408-412頁。本論考の副題は以下の通り:「三 先生の著書と其思想 イ【真理一斑】」。この石原氏の論考は、『石原謙著作集 第十巻』に再掲載される前に、昭和10(1935)年刊行の雑誌『神学と教会』第二巻第一号(昭和十年十月、日本神学校神学会刊)で刊行された。この旧作の論文を補筆することなく、1979年の『石原謙著作集 第十巻』にそのまま採録したのだろう。その理由は分からないが、少なくとも第二次大戦後に更に大活躍された、この碩学の著作集では、『道志流部』に関しても氏の新たな学問的な言及が欲しかった。
- 4) 大内三郎、「第二章 植村正久の思想-その基本思想について-」、『植村正久論考』(東京:新教出版社、2008)、71-115頁。
- 5) 大内、上掲書、102頁。
- 6) 大内、上掲書、105頁。
- 7) 雨宮栄一、「第十一章【真理一斑】」、「第十二章【福音道志流部】」、「若き植村正久」(東京:新教出版社、2007)、302-339頁の諸論から適宜紹介ないし引用する。
- 8) 雨宮、上掲書、331頁。この研究で雨宮氏は、『真理一斑』と『福音道志流部』の各目次を上下に対照させ、両文献の目次の諸題を上下に対照させる言わば「文学的・構造的比較」(これは雨宮氏ではなく、論者棚村の造語である)を通して二著の目次内容の類似性と相違性をチャート化してみせる。その上で、両文献の背後に潜む両者の文学構成上の異同を分析し、その異同の背後に潜む植村の文学的・神学的な意図などを推定しようと努める。こうした方法論的アプローチを採用し、大内氏のような「組織神学的解釈(オンリー)研究」(棚村の造語)にはなかった極めて有効な一つの論証のための補助手段と評価できる。
- 9) 雨宮、上掲書、331-2頁。
- 10) 雨宮、上掲書、333頁。
- 11) 雨宮、上掲書、334頁。
- 12) 「真理一斑」『植村正久著作集4』(新教出版社、1966)、7-188頁。
- 13) 「福音道志流部(しるべ)」『植村正久著作集5』(新教出版社1966)、11-44頁。

- 14) 「H. スпенサー Herbert Spencer :1820-1903 イギリスの哲学者。…ベーコン以来のイギリス経験主義の集大成というべき『総合哲学体系』を樹立した。彼の哲学の特色は物理、心理、社会、倫理の諸現象にあまねく進化論的方法を適用、…認識の相対性を主張…絶対者について不可知論をとったこと…」(『哲学事典』、東京：平凡社、1979年、初版第10刷、789頁)。
- 15) 「I.A.M.F. コント…：1798-1857 フランスの哲学者、数学者で社会学の創始者。…かれの説く有名な3段階の法則は人間の知識の発展に神学的、形而上学的、実証的の3段階を認め、この実証的な人間の知識をさらに…五大現象群に対応させて五つの基礎的な抽象科学をくわえて六つの実証化学区の体系を考える…」(『哲学事典』、517-518頁) 参照。
- 16) 「超越(超絶)主義(transcendentalism) …先験主義、超絶主義とも訳す。先験主義というときはカントやシェリングの先験哲学をさすが、超越主義とか超絶主義というときにはエマーソンを中心とするアメリカのロマン主義運動をさすのがふつうである。…」(『哲学事典』、943-944頁参照)。
- 17) 竹越与三郎『新日本史下』、283-4頁。
- 18) この文章の「要点」を更に纏めれば以下となる：当時竹越が見た明治14(1881)年頃から開始された明治日本の知的「維新(革命)」では、①日本の知識層一般は英国のスเปนサー哲学を進んで摂取した。②だが特に日本の哲学界はスเปนサー、コントの一部を採用しても、宗教(キリスト教、仏教)には反対した。③キリスト教側は超絶哲学を味方とし、スเปนサーとコントに反対した。④この中で『六合雑誌』はキリスト教哲学を主張し、この雑誌を通してドイツの超絶哲学を日本に伝えた。
- 19) 竹越与三郎『新日本史下』、299-301頁。
- 20) この論点に関する本論考執筆者の見解については、次の論文を参照のこと：「明治時代の宣教師—どういふ(福音)伝道をしたのか：その軌跡と評価」、『伝道と神学 No.8』(東京神学大学 総合研究所：2018)、5-25頁、特に11-14頁にある植村正久の救済論の変化と発展に関する棚村の分析を参照のこと。